垂下用筏は孟宗竹長六米及四米のものを以て製作し縦材八本横材八本とし縦材の間隔は約四十五糎を保たしめ十二番線針金を以て縛り八番線針金により石碇に繋留したり

八、垂下方法

海綿の切片は種海綿の運搬豫期の成績を紐め得ざりし爲一定の型狀をとる能はず大体三乃至四糎立方大として長十五糎のアルミニューム線を貫通し五個を鎖狀に連ね一連とし筏の縦材に三分徑棕梱繩を張り之が一條に十二連六十個都合二連百二十個を垂下したり

二、海人草種苗配給試驗

海人草に關する試驗は專ら投石、磯掃除の方法により蕃殖の途を講じ來りたるものなるが近時縣内各地に於て之が增殖施設を計畫實施するに至りたるを以て本年度に於ては種苗の配給を企劃し從來本場に於て施行したる蕃殖試驗地を種苗配給所に充當し次の如く蕃殖試驗の傍ら種苗附着石の配付を實施せり

一、蕃殖試驗

本年度施行の場所は國頭郡羽地村及島尻郡座間味村の二箇所にして前年度の方法に倣ひ左記の通り投石並に親株移殖を施行したり

試驗地	施行月日	親株移殖數	投石數	備考
羽地村地先	自昭和九年九月一四日 至仝 二十九日	二、五三〇株	一三、二〇〇個	現在石塊の一部は磯掃除ヲナシ害敵タル海膽驅除ノ方法ヲ講ゼリ
座間味村地先	自昭和九年七月二十七日 至仝 二十九日	二四〇	九、六〇〇	

二、種苗配付

國頭郡大宜味村に於て海人草增殖施設として投石の方法を講じたるを以て昭和九年四月羽地配給所より種苗附着石六千三百個を配付したり

三、牡蠣養殖試驗

前年度に繼續し本年度に於ても種苗を他縣に求め各府縣連絡協定の下に身入生產量調査並に種苗優劣比較試驗を施行の事としたるが本年度に

於て得たる前回試驗の成績を記述すれば次の如し

一、身入生產量調査試驗

場　所

國頭郡名護町字許田、灣內（前回に仝じ）

試驗期間

自昭和九年二月　至昭和十年三月

養殖方法

杉材を以て横三、八米縱十八米ノ筏一台を製作し之に附着器二十個を貫通して一連としたるもの二百二十二連を〇、五米內外の間隔を以て垂下したり

種　苗

種苗は宮城縣より昭和九年二月購入したるものにして附着器一個の雜貝數は平均十四個內外なり

試驗成績

垂下期間約一ケ年にして即昭和十年三月取揚げ之が成長度並に身入生產量につき調査したるに殼付總重量に於て一千五百十六弱瓩を得たるも剝身重量は僅に七十二强瓩にして約五%の歩留りに過ぎず成績不良に終りたり

成長度調査表

調査時	調査個數	平均 殼高	平均 殼長	平均 殼付 容量	平均 殼付 重量	平均 肉 容量	平均 肉 重量	一坪當生產量 容量	一坪當生產量 重量
昭和九年十一月二日	一九六	七〇、一粍	四〇、三粍	三〇、一竕	四九、八瓦	二、一五竕	二、三瓦	竕	瓦
仝　十二月六日	二四四	七〇、〇	四五、〇	—	四五、四	二、二九	二、四	—	—
昭和十年一月十九日	一五三	七〇、三	四一、一	四四、三	四三、六	二、八八	二、八	—	—
仝　四月八日	八三	八六、三	四九、〇	三四、六	四九、三	五、三五	五、六	六、九七三	七、四二四

備考一坪當生產量は一六連一連八十三個として算出せり

生肉割合調査表

調査時	調査個數	容量 殼付	容量 生肉	容量 百分比	重量 殼付	重量 生肉	重量 百分比	備考
昭和九年十一月	一九六	三〇、一瓩	二、二瓩	七、三%	四九、八瓦	二、三瓦	四、六%	
仝 十二月	二四四	—	二、三	—	四五、四	二、四	五、三	
昭和十年 一月	一五三	四四、二	二、九	六、六	四三、六	二、八	六、四	
仝 三月	八三	三四、六	五、三	一五、三	四九、三	五、六	一一、四	

二、斃死狀況調査

本調査に關しては事情詳細なる觀察を行ふを許さざりしも取揚時に於ける斃死介殼につき之が成育程度及び海況觀測の結果を綜合考察するに斃死率は夏季七、八月の候に於て最高率を示したるものゝ如く取揚時に於て五連につき調査したる處に依れば三七%の斃死介を算出せり

而して垂直的斃死の狀況は上層に於て比較的僅少にして中層に於て多くを認めたり

三、各地產種苗優劣比較試驗

本試驗は前記身入生產量調査試驗仝樣許田灣內に於て垂下式養殖方法により施行したるが之が經過成績次の如し

種苗の種類及大さ

種苗供給府縣名	附着器ノ種類	種苗個數	附着器一枚ノ平均附着數	平均 殼高	平均 殼長	生存數	斃死數	斃死率	垂下月日	備考
宮城	ホタテガヒ	個 二九四	個 一四、七	粍 一〇、七	粍 六、八	二七四	二〇	六、六%	二月六日	調査ハ附着器二十個ニツキ測定以下右ニ仝シ
愛知	仝	二七二	一三、五	一五、二	九、八	二四四	二七	九、九 仝	四日	
廣島	マガキ	五九	三、〇	二三、四	一四、八	三六	二三	二八、九 仝	十四日	
靜岡	仝	一一〇	五、五	二五、四	一七、七	七八	三三	二九、〇 仝	十六日	
熊本	スミノエガキ	四〇九	二〇、四	二三、四	九、六	三七七	三三	七、八 仝	十日	
全羅南道	マガキ	八六	四、三	二三、三	一〇、四	五六	三〇	二四、八 仝	四日	

試驗成績

本年度本縣に於ける牡蠣成育狀況は前記身入生産量調査の結果に於て明かなる如く極めて不良に終りたるも各地産種苗の優劣につき比較表示すれば次の如く一般に十一月以降に於ける調査の結果に依れば介殼の生長に於ては著しき進捗を見ざるも肉量は漸次增加を來し三月取揚時に於ては十一月第一回の調査に比し二、五倍乃至四倍の成育を見たり

介殼調査第一表

種苗區分	垂下當時 殼高	垂下當時 殼長	十一月 殼高	十一月 殼長	十二月 殼高	十二月 殼長	一月 殼高	一月 殼長	三月 殼高	三月 殼長
宮城	一〇、七	六、八粍	七〇、二粍	四〇、二粍	七〇、〇粍	四五、四粍	七〇、二粍	四一、二粍	八六、二粍	四九、一粍
愛知	一五、二	九、八	四三、六	三〇、八	四二、四	三二、七	五一、四	三五、八	四五、三	四三、六
廣島	三三、四	一四、八	四四、九	三三、二	四六、五	三四、一	—	—	六一、七	四三、二
靜岡	三五、四	一七、七	五九、九	四三、三	五五、〇	四三、五	六〇、三	四三、七	六七、九	五五、三
熊本	三三、四	九、六	三六、九	二七、一	四一、七	三〇、八	四三、五	三四、九	五四、一	三八、七
全羅南道	一三、三	一〇、四	四二、六	三〇、九	四六、三	三三、七	四四、二	三一、九	五八、八	三八、九

備考　調査は一連二十個の附着稚介につき測定し其の一個平均を表示せり以下仝じ

介殼調査第二表

種苗區分	垂下當時 容量	垂下當時 重量	十一月 容量	十一月 重量	十二月 容量	十二月 重量	一月 容量	一月 重量	三月 容量	三月 重量
宮城	—	—	三〇、一竕	四九、八瓦	—	四三、六瓦	四四、二竕	四三、六瓦	三四、六竕	四九、二瓦
愛知	—	—	二一、九	一五、六	二二、四	一六、七	—	三九、四	二四、六	三八、三
廣島	—	—	八、八	一三、九	九、五	一七、七	一六、七	二〇、八	一三、七	一六、三
靜岡	—	—	二三、三	二一、三	二三、三	二八、二	一九、九	三一、〇	二八、〇	四三、三
熊本	—	—	七、二	一六、九	九、三	二二、二	二一、九	二五、一	一七、三	二三、五
全羅南道	—	—	一〇、七	一四、二	一三、二	一八、九	一四、六	二〇、五	二四、〇	三二、一

生肉調査表

種苗區分	垂下當時 容量	垂下當時 重量	十一月 容量	十一月 重量	十二月 容量	十二月 重量	一月 容量	一月 重量	三月 容量	三月 重量
宮城	—	—	二、一五瓩	二、三〇瓦	二、二九瓩	二、三六瓦	二、八八瓩	二、二七瓦	五、二五瓩	五、五九瓦
愛知	—	—	一、〇〇	一、一〇	一、一六	一、二五	二、二六	一、九〇	三、〇〇	四、八三
廣島	—	—	〇、八八	〇、九七	一、一七	一、三〇	一、八四	一、二七	四、四〇	三、三〇
靜岡	—	—	一、七四	一、九三	二、三六	三、二八	三、〇九	一、九〇	六、一八	六、八八
熊本	—	—	〇、五九	〇、六六	〇、七七	〇、八三	一、三〇	一、三六	二、三二	二、四三
全羅南道	—	—	〇、九三	一、〇七	一、三九	一、五三	二、〇三	二、〇七	四、〇八	四、三五

生肉割合比較表

種苗區分	調査個數	容量 殼付	容量 生肉	容量 百分比	重量 殼付	重量 生肉	重量 百分比
宮城	八三個	二四、五九	五、二五	一五、一七%	四九、三一	五、五九	一一、三五%
愛知	八三	二四、六三	四、四〇	一七、八七	天、二九	四、八三	二、六一
廣島	六〇	一三、六六	三、〇〇	二一、九六	一六、二五	三、三〇	一九、六九
靜岡	五九	八、〇〇	六、一八	三、〇七	四三、三〇	六、八八	一五、八八
熊本	七一	一七、三三	二、三二	一三、三三	三三、五三	二、四三	一〇、三三
全羅南道	三六	二四、〇〇	四、〇八	一七、〇〇	三一、一〇	四、三五	一三、五五

以上表示せる諸種の關係につき之が優劣を摘記すれば次の如し

一、宮城縣産は介殼の成長度に於ては遙に他縣産に優るも生肉量に於て靜岡縣産に劣り生肉割合の如く極めて不良なり

二、愛知縣産は介殼の成長割合に生肉量比較的豐富なるも概して小型なり

三、廣島縣産は介殼、生肉、共に成育著しく不良なるも殼介に對する生肉割合は極めて良好なり

四、靜岡縣産は介殼の生長に於て宮城縣産に劣るも生肉量に於て優位を占め生肉割合は良好なり